

軽井沢大賀ホール支配人

大西

泰輔さん(71)

上

聞き手・北沢房子

軽井沢大賀ホールに勤務する小林静さんから「音楽に形はありませんが、音楽の感動というモノをつくる人です」と、大賀ホール支配人の大西泰輔さん(71)を紹介されました。輝く緑に包まれた軽井沢に、大西さんを訪ねました。

\* \*

「これが、大賀典雄さんが理想としたホールです。世界最高のホールの一つだろうと皆さん言ってくれます」。大西さんに案内されて、扉を開

会ってみたい

モノつくるひと

ける。2005年、当時ソニー名誉会長で、声楽家、指揮者の大賀氏が私財を投じて建設し、軽井沢町に寄贈した。

「世界一の音響」を目指した五角形のホールは、カラマツを多用して軽井沢の自然をそのまま取り込んだように美しい。ステージと、取り囲む客席の一体感が他のホールにない雰囲気を感じている。このホールの運営を任せられ、軽井沢に音楽文化が育つよう指揮を執るのが大西さんだ。

大西さんは、CBS・ソニーレコード(現ソニー・ミュージックエンタテインメント)の音楽担当として、サイモン&ガーファンクルやビリー・ジョエルら数々のアーティストを日本に紹介し名を広めた。ソニー・ミュージックグループ企業の社長やソニー音楽芸術振興会の専務理事を歴任、大賀氏とともに日本の音楽業界を引っ張ってきた。

「ここで私が一生懸命やっている理由は、大賀さんの魅力にあります。大賀さんが実践してきたのは、良いものを追求すること、人が感動するものを提供すること。ソニーでも、単に機械を作るだけでなく、文化を加え、いかに人を感動させるかを考えた」

その姿勢はそのまま大西さんに当てはまる。ステージを作り上げていく時、より深い感動を引き出すには、完璧な演出を目指さなければいけない。始まる瞬間に向けて期待

# 人が感動する音楽 追求

を高め、演奏家が最高の状態で出られるように、開演までの時間にも、開場から5分前のベル、アナウンスと、計算し尽くした「間」を積み上げる。

大西さんが軽井沢で仕事をするのは「最低週1日以上」。あとは東京でコンサートの準備をし、演奏家らと会って話をすることも多い。40年間に培った人脈により、軽井沢の大賀ホールならではの演奏家のコンサートが実現する。構成なども特別なアレンジとなり、それを期待して多くの人が足を運ぶ。

今年のクリスマスには、ヘンデル作曲の宗教音楽メサイアのコンサートを予定している。「120年ほど前に英国聖公会の宣教師によって西洋音楽が紹介された軽井沢の歴史を考えると、今、うちでやることに意味がある」。大賀ホールを舞台に、軽井沢ならではの音楽文化を育てようという壮大な取り組みは次回にしよう。

この人の話を読みたい、といった希望を、連絡先を明記し、地域活動部(ファクス026・236・3193、電子メールt-chiiki@shinmai.co.jp)へお寄せください。



五角形をした軽井沢大賀ホールに立つ支配人の大西泰輔さん



軽井沢大賀ホール支配人

大西

泰輔さん(71)

Ⓣ

聞き手・北沢房子

軽井沢大賀ホール支配人の大西泰輔さん(71)は、「音楽の感動」をつくるプロである。ホール運営にとどまらず、軽井沢ならではの音楽文化を育てたいと取り組んでいる。

音楽のとりこになったのは14歳の時。疎開を経て東京に戻ると、ラジオからアメリカンポップスが流れてきた。強烈にショックを受けて、歌詞カードを見つけ、歌いながら必死になって覚えました」

英語が楽しくなった大西さんは、近くにできた教会へ通う。「英語は全部リズムでできているから、英語を学ぶには音楽が一番だ」と。大学の英米文学科でも、リズムを頭に入れながら英語を読んでい

会ってみたい

モノつくるひと

くどピタツとはまった。

卒業後は大手の広告会社に就職。28歳の時、ソニーがアメリカのCBS社と合併で設立したCBS・ソニーレコードに一期生で入社した。「求人広告にあった『音楽の夢を実現したい人』の1行に心をとらえられました」。日本ではアメリカの演奏家の素晴らしい作品が売れていない。絶対にもっと売れるはず。その夢を伝え、採用された。

それまではラジオ局がレコード会社に必要なレコードを借りに来ていたのを、大西さんたちは、これだと思った曲のサンプル盤を局に持ち込んだ。1970年前後の「サウンド・オブ・サイレンス」「サイモン＆ガーファンクル」「長い夜(シカゴ)など多くのヒットが生まれた。洋楽を担当しながらも、和洋、ジャンルを越えてかわり、音楽による感動を追求し提供してきた。

大西さんは今、大賀ホールを舞台に軽井沢ならではの音楽文化を育てようとしている。「軽井沢には約120年前にA・C・シヨールという宣教師がやって来て、礼拝で賛美歌を歌いました。夏は全国の宣教師が集まり、音楽会をしたりダンスパーティーをしたり。そういう中から独特の西洋風文化が生まれ、町の人

軽井沢大賀ホールを町に寄贈した大賀典雄さんが指揮するポスターの前に立つ大西泰輔さん



# 感動 地道に発信し続ける

たちに引き継がれています。それを発展させていきたい」町の子供たちもホールを使えるようにと、2005年の開館を機に、ホールを拠点にした少年少女合唱団とジュニアオーケストラが発足。合唱団は国内外の一流演奏家や交響楽団と共演。オーケストラは東京フィルハーモニー交響楽団の指導も受け、5月からは大人にも門戸が開かれた。「こうしたことが子供たちの心と体の中に残っていけば、文化として表れてくる。将来、このホールを使ってよい音楽を世界に発信しようという雰囲気をつくっていくてくれればいいですね。さらにはオーケストラのザルツブルク音楽祭のように、演奏家がホームステイして演奏の合間に町の人に音楽を教えるような関係ができればいい。これからも地道に感動を発信し続けることが大切だと思います」

問い合わせは軽井沢大賀ホール(☎0267・42・0055)。

この人の話を読みたい、といった希望を、連絡先を明記し、地域活動部(ファクス026・236・3193、電子メールt-chiiki@shinmai.co.jp)へお寄せください。